

福岡県教員養成史研究(七)

平 田 宗 史
(1981年9月3日 受理)

(一) はじめに

本稿は、明治41年から大正14年までの小倉師範学校、福岡師範学校の検討につづいて、その時期の福岡県女子師範学校の実態を考察するものである。

(二) 福岡県女子師範学校の施設 および組織

明治36年4月、独立の福岡県女子師範学校が設立された。しかし、翌5月には、新築教室一棟が火災に会い、焼失したのである。その時、荷造りも解かぬまま廊下に山積していた新調の器械、器具、標本、薬品類をはじめ、当時、まだ珍しかったピアノ一台までも、焼失した。^④ 翌年4月には、校舎も再築され、門衛所、寄宿舎も一棟竣工したので、明治37年5月6日、全部移転し、授業が開始されたのである。移転当時は、施設および設備も、不十分であった。しかし、明治40年に附属小学校、明治42年、寄宿舎一棟、本館一棟、明治43年、手工教室、作法実習教室、音楽教室、講堂、図書閲覧室、書庫、物置などを新築した。このように施設・設備を充実してきたけれども、二部生を設置したので、生徒数も、著しく増加し、明治44年においては、学校の設備は、「一旦完結セシモ猶狭隘ニシテ其ノ不便尠カラサルニ至レリ」^⑤と明示してあるように、まだまだ、不備であった。したがって、明治45年、附属小学校の三教室、校舎二棟、雨天体操場、裁縫、理科（階段教室）、弓道場、寄宿舎（二階建二棟、平屋二棟、食堂、浴場、洗面所、洗濯場、炊事場）、大正3年、割烹教室が増築され、大正3年には、「女子師範学校ノ設備モ亦大体ニ於テ不便ヲ感ズル点ナキニ至レリ」^⑥という状態になった。創立以来10年たって、やっと福岡県女子師範学校の施設および設備が、ほぼ完備したのである。

福岡県女子師範学校の教員は、明治41年には、教諭15名（男子10名、女子5名）、助教諭0名、その他の教員1名、計16名であった。^⑦ そのうち、教諭の教員免許状を受得した事由の内訳をみると、高等師範学校卒業者3名、高等師範学校専修科卒業者

4名、経歴により免許状を得たる者3名、女子高等師範学校卒業者4名、女子高等師範学校専修科卒業者1名である。^⑧ 施設および設備が、ほぼ完備した大正3年の教員は、有資格者20名（男子11名、女子9名）、無資格者2名（男子）、計22名であった。^⑨ その有資格教員の免許状を受得した事由の内訳をみると、高等師範学校卒業者11名（男子6名、女子5名）、高等師範学校専修科卒業者2名（男子）、試験検定者で師範学校卒業者3名（男子2名、女子1名）、師範学校講習科卒業者1名（男子）、高等小学校卒業者1名（女子）、無試験検定者で東京女子英学塾卒業者1名（女子）であった。^⑩

明治40年4月制定の『師範学校規程』に基づいて改定された明治41年3月の『福岡県師範学校学則』によると、その当時の福岡県女子師範学校の学科は、本科と講習科とに大別され、さらに、本科は、高等小学校から進学する第一部と高等女学校から進学する第二部とに分れていた。したがって、福岡県女子師範学校の教育の実態を、本科第一部の教育、本科第二部の教育、講習科の教育、寄宿舎と附属小学校での教育とに分け、考察して行きたいと思う。

(三) 福岡県女子師範学校本科第一部 の教育

明治41年3月制定の『福岡県師範学校学則』によると、本科第一部生徒の入学資格は、修業年限3カ年の高等小学校卒業者か、その検定に合格した者であり、その中から、一般募集したのである。すなわち、薦挙制はとられなかった。入学志願者の試験は、身体検査、学力試験および口頭試問の三種であり、学力試験は、予備試験と本試験とがあった。予備試験は、入学志願者所在の郡役所で「学校長ヨリ送付シタル試験問題試験方法及時間割ニ依リ」、福岡師範学校、小倉師範学校と同日に行なうのであった。予備試験の学科は国語科（読方、綴方）、算術科（珠算ヲ除ク）、日本歴史科、地理科、理科、図画科であり、募集人員の1.5倍に当たる者が本試験を受けるのである。本試験は身体検査、学力試験および口頭試問の三つが実

施されたのである。^⑧

大正元年12月23日改定の『福岡県師範学校学則』では、「一般志願者ニ就キ学校長ニ於テ検定試験ノ上之ヲ選抜ス」となり、入学試験は本試験のみとなった。そして、女子の第一部入学志願者の試験は、女子師範学校、久留米高等女学校、小倉高等女学校の三カ所で実施されることとなったのである。^⑨

大正10年の福岡県女子師範学校生徒募集になると、第一部女子の試験科目は、国語（読方、綴方、書方）、算術、理科、図画、裁縫、身体検査、口頭試問で、その女子師範学校内で実施されたのである。^⑩

本科第一部の入学志願者数と入学者数をみると表（1）の通りである。この表から言えることは明治41年から大正9年までの入学志願者は、定員の2倍前後で、男子と比べると、かなり少ない。しかし、男子においては、入学志願者が激減している大正10年頃に、増加している。^⑪ すなわち、女子の場合は、給費額の減額や経済的な好況が、入

学志願者の減少には、直接つながらないようである。

入学者の前歴をみると、明治41年には、高等小学校及全補習科卒業者54人、准教員養成所卒業者9人、准教員免許状受領者10人、其の他7人、明治42年には、高等小学校及全補習科卒業者69人、准教員養成所卒業者7人、其の他4人である。明治43年以降は、高等小学校卒業者と其の他の項目しかないが、明治43年、大正7～8年は、其の他が多く、明治45年、大正2～4年、大正10年、12～13年は、高等小学校卒業者が圧倒的に多い。その他の年は、高等小学校卒業者がやゝ多い程度である。^⑫ 男子の場合は、各年とも、其の他の項が圧倒的に多いのに対し、女子の場合は、高等小学校を卒業して、福岡県女子師範学校に入学する者が多いのである。^⑬

入学者の父兄の職業をみると、表（2）の通りである。父兄の職業で一番多いのは、男子と等しく、農業が多い。しかし、男子では、農業というのが、全体の50～60%、年によっては80%も占め

表（1） 本科第一部の入学志願者と入学者（明治41年～大正13年）

年 度	明治41	42	43	44	45	大正2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13
入学志願者	204	173	172	173	184	215	158	118	217	213	198	229	245	337	356	331	382
入 学 者	80	80	80	80	80	80	80	80	78	77	80	80	84	84	84	80	81

註 『福岡県統計書 第二編 学事』により作成。

表（2） 本科第一部入学者の父兄の職業

年度	明治41	42
農	36	26
工	3	4
商	15	9
庶	26	21
其 他		20
合 計	80	80

年 度	明治43	44	45	大正2	3	4
農	30	30	26	29	32	24
工	2	2	2	4	3	2
商	10	12	11	11	10	7
其 他	35	36	41	36	35	47
合 計	77	80	80	80	80	80

年 度	大正7
農 業	34
工 業	1
鉱 業	1
商 業	19
漁 業	
官公吏	2
軍 人	
会社員	5
教 員	7
其 他	11
合 計	80

年 度	大正9	10	11	12	13
農 業	26	28	34	34	24
水 産	1				
鉱 業	3	3	1	2	1
工 業	3	6	7	1	7
商 業	24	16	19	12	23
交通業		4	1	1	3
公務自由業	20	19	12	16	13
其 他		3	2	4	9
家事使用人				1	
無職業	7	5	8	9	1
合 計	84	84	84	80	81

註 『福岡県統計書 第二編 学事』により作成。

表(3) 本科第一部入学者の年齢

年 度	明 治 41	42	43	44	45	大 正 2	3	4
最 多	19.6	20.1	17.7	17.8	18.3	20.2	18.1	18.8
最 少	15.1	16.1	15.0	15.1	15.0	15.0	15.1	15.1
平 均	16.3	16.6	15.7	16.0	16.8	15.11	16.1	15.9

註 『福岡県統計書 第二編 学事』より作成。

表(4) 本科第一部学科課程表(女子)

計	英 語	体 操	音 楽	手 工	図 画	習 字	裁 縫	家 事	物理及化学	博 物 学	数 学	地 理	歴 史	国語及漢文	教 育	修 身	学 科 目	学 年
																	時 数	毎 週
(三) (四)	(三)	三	二	三		二	四			二	三	二	二	六		二	時 数	毎 週
	解 音、綴 書、取、 會話、 習字	遊 戲、普 通体操	單 音唱歌	手 工 天然物 ノ模造 日用器 具ノ製 作	図 画 寫生 画、 臨画 考案 画、 幾何 画	楷 書、 行書	縫 ヒ方、 裁チ 方 繕ヒ 方等			衛 生、 植 物	算 術	日 本地 理 ノ概 要	日 本 歴 史	国 語 講 読、 漢文 講 読、 文 法、 作 文		道 徳ノ 要領 作法		第 一 学 年
(三) (四)	(三)	三	二	三		一	四		二	二	三	二	二	四	二	一	時 数	毎 週
	話 方、 文、 法、 書、 取、 習 字	遊 戲、普 通体操	複 章唱 歌 樂器 使用 法	手 工 天然物 ノ模造 日用器 具ノ製 作	図 画 寫生 画、 臨画 考案 画、 幾何 画	楷 書、 行書、 草書、 假 名	縫 ヒ方、 裁チ 方 繕ヒ 方等		物 理、 化学	動 物	算 術	外 國地 理	外 國 歴 史	国 語 講 読、 漢文 講 読、 文 法、 作 文	心 理	道 徳ノ 要領 作法		第 二 学 年
(三) (四)	(三)	三	二	三		一	四	二	二	一	二	一	二	三	四	一	時 数	毎 週
	話 方、 文、 法、 書、 取、 會 話	遊 戲、普 通体操	單 音唱 歌、 複音 唱歌、 樂器 使用 法、 教授 法	手 工 天然物 ノ模造 日用器 具ノ製 作	図 画 寫生 画、 考案 画 教授 法	行 書、 草書、 假 名、 教授 法	縫 ヒ方、 裁チ 方 繕ヒ 方等	衣 食住、 家計 簿記 実習	物 理、 化学、 教授 法	鉱 物、 教授 法	算 術、 代 数、 教授 法	人 文地 理ノ 概 説、 教授 法	地 文ノ 一 班 教 授 法	国 語 講 読、 漢文 講 読、 作 文、 教授 法	論 理 教 授 法 及 保 育 法 ノ 概 説	道 徳ノ 要領 教授 法		第 三 学 年
(三) (四)	(二)	二	一	二			三	二	四		二			二	九 三	二	時 数	毎 週
	話 方、 文、 法、 書、 取、 會 話	遊 戲、普 通体操	單 音唱 歌、 複音 唱歌、 樂器 使用 法、 教授 法	手 工 天然物 ノ模造 日用器 具ノ製 作	図 画 寫生 画、 考案 画 教授 法		縫 ヒ方、 裁チ 方 繕ヒ 方、 教授 法	養 老、 育 兒、 看 病 等 実習	物 理、 化学、 教授 法		幾 何、 教授 法			国 語 講 読、 漢文 講 読、 教授 法	近 世 教 育 史、 教 育 制 度、 学 校 管 理 法、 学 校 衛 生 制 度、 教 育 実 習	倫 理 学 ノ 一 班 現 行 法 制 上 ノ 事 項 教 授 法		第 四 学 年

る時があったが、女子の場合は、多くても45%であり、少ない時は、30%以下である。^④ 農業について多いのは、庶業というサラリーマンや、商業の出身者である。女子の出身階層は、男子の場合とかなり違う。

入学者の年令をみると、表（3）のように、それは、最低15歳から最高20歳、平均して16歳の者が入学したのである。

入学者は、明治20年代には、食費、被服費、学用品、日用品など一切費で賄われていた上、小使銭まで支給されたのであるが、次第に、それらは減額され、明治39年1月の改正では、本科第一部の一年生は、自費生となった。さらに、大正2年度から、「女生徒ニ毎年袴一、草履六ヲ給與シ、・・・・・・一日精米三合五勺、精麦一合五勺、菜代六錢五厘ヲ給シ、其他湯浴及療養費ヲ給シ来タリシヲ」、食費、被服費を給しなくなった。そして、単に、学資の補給として、一日につき15銭を給するのみになったのである。^⑤ 大正6年には、さらに、10銭に減額されたが、大正7年には、物価高騰の結果、32銭に増額された。^⑥

本科第一部の学科課程表^⑦は、表（4）の通りである。この学科課程表は、明治41年3月2日『福岡県師範学校学則』の改正によって、制定されたものであるけれども、これまでの学科課程表と大きく異なる点は、修業年限が3カ年であったのが男子と同じく4カ年に延長された点である。すなわち、これによって、女子師範学校も、修業年限の点において、男子と等しくなった。学科課程表の内容をみるに、これまでと異なっている点は、国語、漢文と分れていたのを国語及漢文と統合したり、理科を博物、物理及化学、家事を家事、裁

縫に分けたり、新しく手工をとり入れたり、女子の場合は、英語を随意科としてとり入れている点である。^⑧ 当時、教えられた学科の中、福岡県女子師範学校卒業生は、「どの学科にもいろいろな楽しい思い出、苦しい思い出があるが、鳥飼里の会や、同期の同窓会の時等に話題になる学科は、音楽、図画、体操等が多い。」^⑨と語っているように音楽、図画、体操等に力を入れたものと思われる男子師範学校でも、体操、手工、音楽、図画の技能科を特に重視したと言われているが^⑩、女子師範学校でも、同じであったのであろう。

当時の学習活動をみるに、「開校当時から昭和二十四年福岡学芸大学に包括されるまで、生徒は寮生活が本体であった。毎朝当日の午前中の時間割に必要な荷物を持って廊下づたいに登校していたが、教室が学科別であったので、一時間毎に教室を移動しなければならなかった。冬の寒い日など前の授業が済んでいなかった場合、火気のない廊下で震えて待っていたこともあった。午前の授業が終わると寮に帰り、温い昼食をいただき、部屋で休憩して午後の授業に出ていたが、土曜日以外は毎日六時間授業で、みっちり鍛われた。」^⑪という。

学科試験は、大きく分けると、学期試験と学年試験とに分けられ、各学科の最高点を100点とし、「各学科目五十点以上平均六十点以上ヲ得タルモノヲ修業若ハ卒業セシム」^⑫と定められている。しかし、落第者は、表（5）にみるように、男子に比べると、かなり少ない。^⑬これは、女子学生の優秀性を表わしているのかもしれないが、「本条ノ定点ニ満タサルモ平素成績佳良ナル者ハ学校長ノ見込ニ依リ修了若ハ卒業セシムルコトアルベ

表（5） 本科第一部の及第と落等の人数

年 度		明治 43	44	45	大正 2	3	4	7	9	10
第一学年	級	75	79	79	76	79	78	76	83	81
	落	0	1	0	1	0	0	3	0	3
第二学年	級	75	73	78	79	75	76	77	74	77
	落	0	0	0	0	0	0	1	2	3
第三学年	級	73	74	69	77	77	71	67	73	68
	落	0	0	0	1	0	0	0	0	3
第四学年	級		71	73	70	78	75	74	72	69
	落		0	0	1	0	0	1	2	3

註 『福岡県統計書 第二編 学事』より作成。

表(6) 本科第一部の退学者数

年 度	明治 43	44	45	大正 2	3	4	5	6	7	9	10	11	12
疾病	第一学年	2	4		1	1	1	2	1	2	3		
	第二学年	2	1	1	1	2		3	2	1	3	1	
	第三学年		1	2	2	4		2	3	2	1	2	
	第四学年			1		1	1	1		1	1		2
懲戒	第一学年												
	第二学年												
	第三学年									1			
	第四学年									1			
死亡	第一学年			1									
	第二学年						1			1	1		1
	第三学年						2		2		2	4	
	第四学年		1				1		1		2	4	1
其他	第一学年			1	2	1	1		3				
	第二学年			1								1	1
	第三学年			1									
	第四学年												
合 計	4	7	6	5	4	9	7	8	12	9	13	12	5

註 『福岡県統計書 第二編 学事』より作成。

シ」[◎]という但し書きを利用したのかもしれない。

落第者は少ないけれども、表(6)にみるように、退学者数は、多い。その理由は、疾病および死亡というが多く、男子のように、懲戒とか、学業不振というその他の理由は少ないのである。[◎]

(四) 福岡県女子師範学校本科第二部の教育

明治41年3月の『福岡県師範学校学則』の制定により、福岡県女子師範学校には、高等小学校卒業者を入れる本科第一部の外に、高等女学校卒業者を入れることを原則とする本科第二部が設置されたのである。本科第一部は一般の志願者より募集したのに対し、本科第二部は、つぎの二種の募集方法をとったのである。

「第一種 郡市長ノ薦挙ニ係ル者

第二種 一般ノ志願ニ係ル者」[◎]

しかし、「第二種ハ第一種ノ定員ニ満タサル場合

ニ限り募集ス」[◎]るのであって、第一種の郡市長の薦挙制を原則としたのである。この原則の下に、第二部の第一回生を募集したのであるが、第一種生のみでは定員に達しないので、再度募集したのである。八女郡は、つぎのような募集を、各町「学第三四二号

福岡女子師範学校第二部第一種生募集定員ニ満タサルニ依リ而新聞紙上広告ノ通り第二種生募集相成候条精々御勧誘ノ上多数出願候様御取計相成度此段照会候也

追テ高等女学校卒業ノ資格アル者ハ定員ニ満タサル限りハ無試験入学差許サレ候且ツ第二種生ハ検定合格スルトキハ右等ノ資格ナキモ入学許可セラル、答ニ候条御了知相成度此段申添候也

明治四十一年四月二日

学務課長郡視学山路忠夫同

町村長
各 学校長殿

◎」

村長・学校長にしたのである。本科第二部の入学志願者数と入学者数を見ると、表（７）の通りである。第１回の募集は、再度の募集が効を奏してか、124名の志願者があり、80名の募集に対し、62名入学している。その後、大正５年まで、入学志願者は、入学者の１倍余りであった。大正６年と７年は、入学志願者は以前と変らないけれども、募集人員が半減したため、入学志願者は入学者の３倍前後となっている。大正９年には、男子に先だって、本科第一部より定員を増加し、女子の教員養成を第二部本体に転換した。

入学者の前歴をみるに、明治41年は、設置当初で、募集に苦労したためか、高等女学校卒業生34人の外に、高等女学校補習科卒業生24人、高等小学校及全補習科卒業生2人、准教員養成所卒業生1人、准教員免許状受領者1人と前歴が異なっていたが、明治42年には、高等女学校補習科卒業生40人のみであり、明治43年以降は、わずかの例外を除いて、高等小学校卒業生のみとなった。⁶⁵

入学者の父兄の職業、表（８）のように第一部においても、男子より農業出身者が少なく、第二部においては、一層、農業出身者の占める割合が

表（７） 本科第二部の入学志願者と入学者（明治41年～大正13年）

年 度	明治41	42	43	44	45	大正2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13
入学志願者	124	41	55	136	116	114	151	142	164	137	102	155	180	252	361	530	508
入 学 者	62	40	40	80	79	80	95	103	89	40	40	80	122	159	160	158	160

註 『福岡県統計書 第二編 学事』より作成。

表（８） 本科第二部入学者の父兄の職業

年 度	明治41	42	年 度	明治43	44	45	大正2	3	4	年 度	大正7	年 度	大正9	10	11	12	13
農	17	8	農	8	15	11	27	30	25	農 業	10	農 業	31	39	48	55	52
工	3	1	工	0	4	1	5	2	7	工 業	4	水 産			1		
商	7	13	商	5	16	18	18	17	12	鉱 業	1	鉱 業	2	7	4	3	2
庶	35	5	其 他	27	35	49	30	46	59	商 業	8	工 業	11	7	4	8	7
其 他		13	合 計	40	80	79	80	95	103	漁 業	1	商 業	34	45	39	37	37
合 計	62	40								官公吏	4	交通業					1
										軍 人		公務員	29	42	51	38	48
										会社員	2	其 他		4	6	2	3
										教 員	5	有業者			1		
										其 他	5	家事					
										合 計	40	無職業	15	15	6	15	10
												合 計	122	159	160	158	160

註 『福岡県統計書 第二編 学事』により作成。

表（９） 本科第二部入学者の年齢

年 度	明 治41	42	43	44	45	大 正2	3	4
最 多	20.9	22.3	20.4	19.09	24.2	25.2	23.10	20.0
最 少	15.7	16.9	16.0	16.0	16.0	16.1	16.0	16.0
平 均	17.4	17.6	17.8	17.02	17.4	17.6	16.11	17.4

註 『福岡県統計書 第二編 学事』より作成。

表(10) 本科第二部学科課程表(女子)

計	英 語	体 操	音 楽	手 工	図 画	裁 縫	物理及化学 博物	数 学	地 理	歴 史	国語及漢文	教 育	修 身	学科目	学年	
														時數	每週	
三四	三	三	二	三		三	二	四	二	二	五	四	一	第一學年	時數	每週
	發音 綴字 作文 文法 習字 訳解 書取	遊戲 普通体操	單音唱歌 複音唱歌 楽器使用法	手工 天然物ノ模造 日用器具ノ製作	図画 写生画 考案画及幾何画ノ補習	縫ヒ方 裁チ方 繕ヒ方等	博物ノ補習	算術(代数)	地理ノ補習 外国地理 地文及人文	日本歴史及外国歴史ノ補習 教授法	国語 講読 作文 漢文 講読	心理 論理 教育ノ理論	道德ノ要領作法			
三四	三	三	一	二		三	三	三			三	八	三	第二學年	時數	每週
	讀方 訳解 文法 書取 教授法	遊戲 普通体操 教授法	單音唱歌 複音唱歌 楽器使用法	手工 天然物ノ模造 日用器具ノ製作	図画 写生画 考案画及幾何画ノ補習	縫ヒ方 裁チ方 繕ヒ方 教授法	物理及化学ノ補習 教授法	算術(代数 幾何) 教授法			漢文 講読 作文 教授法	教育実習 教育制度 学校管理法 近世教育史	倫理學ノ一班 現行法制上ノ事項 教授法			

少ない。農業出身者の全体の中で占める割合は、多くても、30%で、平均して20~25%程度である。商業とか、公務自由とかいう入学者が農業とほとんど同じである。これは、第二部の入学者が、高等女学校卒業者となっているからであろう。

入学者の年齢は、表(9)のように、最高25.2歳、最低15.7歳、平均して17歳である。第一部生より、平均して1歳余り高いのである。そして、その入学者には、「本科第二部生徒ニハ在学中中学資トシテ毎月……女生徒ニハ金五円ヲ支給ス」⁹⁾とあるように、毎月金5円支給されたのである。

本科第二部の学科課程表¹⁰⁾は、表(10)の通りである。この学科課程表の特徴は、男子の場合は、一カ年の修業

表(11) 本科第二部の退学者数

年 度		明治 43	44	45	大正 2	3	4	5	6	7	9	10	11	12
疾病	第一学年		7	1	2	1	1	3			1		3	1
	第二学年	1												
懲戒	第一学年													
	第二学年													
死亡	第一学年			1	1									
	第二学年													
其他	第一学年			7	1			1		1			1	
	第二学年													
合 計		1	7	9	4	1	1	4	0	1	1	0	4	1

註 『福岡県統計書 第二編 学事』より作成。

であるのに対し、女子の場合は、二カ年の修業である点である。内容的には、教育という学科目の時間が多く、しかも、それぞれの教科中に教授法の時間が含まれている。しかしながら、修業年限が2カ年という余裕がある所為か、男子に比べると、英語などの一般教養的な科目も教えられているのも一つの特徴である。ところが、明治43年4月から、女子の第二部も、修業年限一カ年となり、学科課程の内容も、英語などが廃止され、男子と同じように、教科専門、教職専門が重視されるようになるのである。⑨

学科試験のやり方は、第一部生と同じであるけれども、落第者は、大正10年に3名いるのが例外で、各年、ほとんどいない。第一部生も、落第者は少ないけれども、第二部生は、より少ないのである。しかし、第一部ほどではないけれども、疾病などで、退学する者は、表(11)に見るようにほとんど、毎年、いるのである。

(五) 福岡県女子師範学校講習科の教育

女子の小学校教員講習科は、福岡県女子師範学校が設立される以前にも、設置されていた。福岡県女子師範学校が設立されると、小学校女子教員講習科をそれに附設することになった。明治41年3月、『福岡県師範学校学則』が改定されると、講習科規程も改正されたのである。それによると講習科は、小学校正教員の現職に在る者に必要な講習を為す甲種講習科と、尋常小学校本科正教員たらんとする者に必要な講習を為す乙種講習科との二種があった。甲種講習科は、現職教育であり、乙種講習科は尋常小学校本科正教員を養成しようとするものであった。福岡県女子師範学校は、その乙種講習科を設置したのであった。乙種講習科の生徒募集は、本科第二部生徒の募集方法を準用するのである。すなわち、郡市長の薦選による募集の第一種と、一般の志願者より募集する第二種とあり、第一種の募集を優先するのであ

表(12) 乙種講習科の入学志願者と入学者と卒業生

年 度	明治41	42	43	44	45	大正2
入 学 志 願 者	44	104	120	157	137	
入 学 者	39	40	40	40	40	
卒 業 生		38	39	39	39	37

註 『福岡県統計書 第二編 学事』により作成。

た。そして、第一種は尋常小学校准教員免許状を有する者に限り応募を認め、学力試験を実施しなかった。しかし、第一種の入学志願者で定員に達しない場合は第二種を募集し、尋常小学校准教員免許状を有しない者や、定員を超過した場合には、すべての者に試験を実施した。その試験は、身体検査、学力試験、および口頭試問の三種であった。⑩

乙種講習科の入学志願者と入学者と卒業者の変遷は、表(12)のとおりである。明治41年の講習科規程改定当初においては、入学志願者は少なかったが、それ以降、講習科が廃止されるまで、平均して、3倍前後の応募者があったのである。

表(13) 乙種講習科入学者の前歴

年 度	明治41	42
高等小学校全補習科卒業生		11
准 教 員 養 成 所 卒 業 者		5
准 教 員 免 許 状 所 有 者	39	24
合 計	39	40

註 『福岡県統計書 第二編 学事』により作成。

乙種講習科入学者の前歴は、表(13)の通りである。明治41年は、すべて准教員免許状所有者であるが、明治42年は、准教員免許状所有者の外に高等小学校全補習科卒業生、准教員養成所卒業生も入学している。その入学者の年齢は、明治41年には、最高20歳3カ月、最低15歳5カ月、平均17歳6カ月、明治42年には、最高20歳10カ月、最低16歳、平均17歳7カ月の者が入学している。本科第一部の入学者より、やや年齢が高く、本科第二部の入学者の年齢とほぼ同じ年齢の者が入学して

表(14) 乙種講習科入学者の父兄の職業

年 度	明治41	42	43	44	45
農	17	22	9	18	11
工	0	2	0	1	3
商	5	5	10	8	4
庶	17	5			
其 他	0	6	21	13	22
合 計	39	40	40	40	40

註 『福岡県統計書 第二編 学事』により作成。明治43～45年は、庶業という欄はない。

いる。^⑧

乙種講習科入学者の父兄の職業は、表(14)のとおりである。乙種講習科入学者の父兄の職業は男子と比べると、やはり、農業というのは少ない。しかし、本科第一部や本科第二部と比較すると、乙種講習科においては、父兄の職業が農業というのが多い。ついで多いのが、庶業というサラリーマンである。そして、入学者には、毎月金5円の学資が支給されたのであった。^⑨

女子乙種講習科学科課程表^⑩は、表(15)のとおりである。この学科課程表の特徴は、入学者の資格を尋常小学校准教員免許状を有する者を原則としていたためか、教育および教授法の時間が、本科第一部と第二部と比べると少ないことである。それに対し、教科の時間、特に、国語および算術の時間が長い。^⑪ 生徒の学科試験の仕方は、前述の本科第一部の方式と同じである。

(六) 附属小学校と寄宿舎の教育

前記の学科をほぼ修得し、最終学年になると、生徒は、附属小学校で教育実習を受けたのである。

附属小学校は、明治40年4月に開校した。それまでは、「本科生は福岡師範学校内の附属小学校に講習科生は福岡市立当仁小学校に通って」教育実習を受けたのである。^⑫ 附属小学校開校にあたって一番心配したことは、「男子師範の附属小学と距離接近せるため、一時希望通りの数を得らるべきや否や」^⑬ という、入学児童の確保であった。しかし、これは、「鳥飼村全部即ち鳥飼谷二校分共悉皆委託に決し、加ふるに男子附属の女子高等三四年全部をこれに移すこと」^⑭ になり、どうにか解決したのである。設備については、「校具及教具等も成るべく他の学校に於て設備し居らざる方面を完備すべき方針で、目下着々整理中であるが、児童用機の如きも、一種新軸を出したる有益利便のものを用ひんとの趣意より、考案を費した」^⑮ ということである。教授細目にしても、「これも今まで有りふれた形式によらず、新奇有効のものを用ひ

表(15) 女子乙種講習科学科課程表

計	裁縫	体操	音楽	手工	図画	理科	地理	歴史	算術	国語	教育	修身	学科目	学年
三四	三	三	一	三	二	二	二	二	五	七	四	一	時毎 数週	第一 学 年
	縫 ヒ 方	通常ノ 遊戯 普通 衣服ノ 裁縫 ヒ方	唱歌 楽器 使用 法	手工 図画 簡易 ナル 手工	博物ノ 大要	日本 地理ノ 大要	日本 歴史ノ 大要	整数 分数 小数 諸等 数	普通 文ノ 講読 作文 習字	教育ノ 大要	道徳ノ 要旨			
三四	二	二	二	二	二	二	二	二	四	六	六	一	時毎 数週	第二 学 年
	縫 ヒ 方	通常ノ 遊戯 普通 衣服ノ 裁縫 ヒ方	唱歌 楽器 使用 法	手工 図画 簡易 ナル 手工	物理 化学ノ 大要	外国 地理ノ 大要	日本 歴史ノ 大要	歩合 算 比例 求算	普通 文及 小学 校教科 用読本 ノ講読	教授 法及 学校 管理 法ノ大 要	道徳ノ 要旨			

んとする考で」^⑯、開校準備にとりかかったという。そうして、明治40年4月に、附属小学校は、開校された。開校された明治41年度の附属小学校は、尋常小学校において、教員8人(男子6人、女子2人)、児童323人(男子119人、女子203人)、高等小学校において、教員2人(男子1人、女子1人)、児童71人(女子のみ)であった。^⑰ 創立されて10年になる大正5年には、学級は、尋常小学校9学級、高等小学校3学級であり、教員は尋常小学校9人(男子8人、女子1人)、高等小学校3人(男子2人、女子1人)であり、児童数は、尋常小学校394人(男子204人、女子190人)、高等小学校89人(女子のみ)となった。^⑱ このような附属小学校での教育実習は、「教生期間が一学期であった。この間、月に一度は実地課業が」^⑲ あったという。講習科がなくなり、本科第一部生および第二部生の定員が、交互に多くなったり、少

なくなったりする大正初期になると、教育実習は、「ある年は四年い組が一学期、ろ組が二学期、二部生が三学期となり、またある年は一部生が一学期、二部生のい組、ろ組が二学期、は組、に組が三学期となった。」^⑧という。当時は、教育実習期間は長く、生徒にとって、印象深いものであったらしい。又、生徒も、一生懸命に、教育実習に、とり組んだ。「教生期間は寄宿舎でも、特に許してもらって、夜更けまで教材研究などしたものだ。」^⑨とか、「月に一度は実地課業があり、その日が迫ってくると、就寝後も、口の中で教案の順序を暗誦したものだ。」^⑩という。それほど努力しても、実際になると、あがって、予定の半分も進まなかったという失敗も、しばしばであった。そして、「教生日誌、教育実習記録、研究論文と、大へんな仕事だったが、あのぼう大な記録を作るまでに鍛われた」^⑪のであった。

師範教育において、学校での学科教育、附属小学校での教育実習と並んで重要なことは、寄宿舎での教育である。福岡県女子師範学校の卒業生も「女子師範学校の教育といえ、学校での教育と寄宿舎でのそれとが相半ばしていて、これが女子師範卒業生の特質というべきもので、寄宿舎生活の中で形成された面がかなりあると思われる。」^⑫と、寄宿舎での教育の重要性を語っている。又、別の所で、全寮制を原則としていたので、「開校当時から昭和二十四年福岡学芸大学に包括されるまで、生徒は寮生活が本体であった。」^⑬と、生徒の師範生徒時代の生活は、寮を中心に動いていたという。それでは、当時の福岡県女子師範学校の寮宿舎での生活および教育は、どういうものであったかを考察してみよう。烏飼に寄宿舎が、最初に建てられたのは、明治37年で、その後、明治39年に3棟建築され1～2寮は二階建て、3～4寮は平屋、その他浴場、食堂、炊事場、洗面場、洗濯場があった。^⑭ところが、大正8年1月と2月に、変質者による放火事件があった。それによって、2寮と3寮が焼失した。^⑮その結果、「但シ学校長ニ於テ必要ト認メタルトキハ期間ヲ定メ生徒ノ一部ヲ寄宿舎以外ニ宿泊セシムルコトヲ得」^⑯

という規定をいかして、「大正八年から昭和九年頃まで通学を許され」る者もいた。^⑰しかし、原則として、全寮制をとっていたので、大部分の生徒は、寮生活を送ったのであるが、その生活は、「かなり厳しい規則が定められていて、一見、軍隊生活にも似た窮屈さの中で、多数の乙女達がくらししていた。」^⑱とされている。

それでは、寮生活にもう少し、立入ってみよう寮には、舎監の先生が5人ほどおられ、外出や面会の許可、郵便物の検閲などされ、寮生を監視した。各寮には、寮長と副寮長がおり、寮生を毎日点呼し、各室の動静を舎監に報告する任務をもっていた。各室の人数は、部屋の広さによって6人から12人くらい分かれ、最上級生が室長、副室長となり、「新入生までの階級制がまるで軍隊のように厳然としていた。『室長サン』は絶対の存在であり、一年生はあらゆることにいじらしく気を使わなければならなかった。」とされている。^⑲例えば、一年生は、「お茶くみ、冬の炭とり、隣室への伝言などの雑用が多くて、忙しく立ち働かねばならず、『気がきかない。』などとにらまれて泣き顔になることもあった。」と言う。^⑳このように、寮の生活は、舎監→寮長→室長→上級生→下級生というタテの系列が強く、それは絶対であった。

寮生の仕事には、寮長、室長の他に、輪番制の任務があった。それは、上級生の仕事で、舎監室の横の部屋に待機して電話の応待、面会人の応接、舎監の仕事の手伝い的な仕事をする週番、下級生の仕事で、寮生への連絡を各寮に伝えたり、週番の手伝いをする伝令、食事前におひつやお鍋を食卓に配ったり、食事後にあとかたづけをする炊事当番、その他、夜警当番、各部屋毎の役割など、あった。^㉑

寮生活の一日は^㉒、表(16)の通りである。寮生活で、「最もきびしいものは時制であった。」^㉓と言われ、門限はもちろん、起床から就寝まで、鐘かサイレンで、厳しく実行された。先ず、サイレン(鐘)の合図で起床、そして洗面、朝の掃除、神功皇后の御遺跡の方への礼拝、そして、朝食を

表(16) 寮生活の日課

月 割	起床	朝礼	朝食	就課	放課	夕食	点呼	黙学	夜礼	就寝	消燈
11・12・1・2・3	6:00	7:00	朝礼後	8:20	3:00	5:30	6:30	7:00 ↓ 9:20	9:20	夜礼後	9:50
4・5・6・7・9・10	5:30	6:30	朝礼後	8:00	3:00	5:30	6:30	7:00 ↓ 9:20	9:20	夜礼後	9:50

とって登校した。昼食時に一時、寮に帰る。下校すると、洗濯、アイロンかけ、入浴、買物があるときには外出、勉強、そして夕食。夕食後、点呼があり、黙学までのわずかの自由時間を楽しむ。午後7時から9時20分まで黙学。その後、夜礼をして就寝、午後9時50分に消燈。それで一日の仕事が終る。

このように、寮生活は、上級生、下級生のタテの系列が強く、一日の生活は時間が厳しく、「軍隊生活に似ていた」^⑧とされている。

師範生徒の人間形成において、学科の教育、教育実習、寄宿舎での教育が、大きな影響を与えることは言うまでもないが、これらの外、済美会活動というクラブ活動、^⑨修学旅行などの諸行事^⑩などがある。

この女子師範学校を無事卒業した者は、第一部生は、県知事の指定校勤務2カ年を含めて5カ年第二部生と乙種講習科は、県知事の指定校勤務2カ年の奉事義務があった

(七) おわりに

明治41年から大正14年までの福岡県女子師範学

校の実態を考察してきたのであるが、この時期の福岡県女子師範学校の特徴は、つぎの通りである
一つは、創立時と異なり、明治40年代から大正時代になると、福岡県女子師範学校は、附属小学校を設置し、施設および設備の整備充実を図り、女子教員養成機関として整備充実してきたことである。

二つは、高等小学校卒業生が入学する本科第一部の外に、高等女学校卒業生が入学する本科第二部が設置され、しだいに、福岡県女子師範学校も講習科が廃止され、本科第二部本体に変わりつつあることである。

三つは、福岡県女子師範学校も、男子二校と同じく、修業年限4カ年となり、学科目の再編成が行なわれ、学科課程の充実が図られている点である。

四つは、教育実習の期間を一学期間とし、時間的に力を入れている点である。

五つは、全寮制を原則とし、寮の生活は、タテの系列と時間に厳しく、男子ほどではないが、女子の場合も、軍隊的であったことである。

(註)

- ① 鳥飼里の会編『福岡県女子師範学校誌』鳥飼里の会 昭和48年5月20日 43頁
- ② 『明治44年福岡県統計書 第二編 学事』 260頁
- ③ 『大正3年福岡県統計書 第二編 学事』 3頁
- ④ 『明治41年福岡県統計書 第二編 学事』 73頁
- ⑤ 同上書 216～217頁。
- ⑥ 『大正3年福岡県統計書 第二編 学事』 63頁
- ⑦ 同上書 158頁
- ⑧ 拙稿「福岡県教員養成史研究」(五)『福岡教育大学紀要』第29号 第4分冊 昭和55年2月 66頁
- ⑨ 『福岡県公報』第21号 大正元年12月26日 11頁
『門司新報』(大正2年2月18日)は、入学試験の方式の改正をつぎのように報道している。
「本県女子師範第一部入学志願者の入学試験は従来関係郡市役所に於て予備試験を行い更に其優秀なる者に対し同校に於て再試験を行ひ居りしも今年より是を図ると同時再応の手續きを廃し豊前地方は小倉高等女学校、福岡地方は同校、筑後方面は久留米高等女学校に於て(同校より)試験委員出張試験を行ふことに変更し如上各所共十六日より一斉に開始したる」
- ⑩ 福岡県教育百年史編さん委員会編『福岡県教育百年史』第三巻 資料編 大正・昭和(1) 福岡県教育委員会 昭和53年11月1日 350頁 前掲書『福岡県女子師範学校誌』によると、明治後期から大正時代にかけての福岡県女子師範学校の入学試験の状況を、つぎのように報告している。
「入学試験は、明治の一時期は各郡市で予備試験をして、仮入学の上、再度試験をして落とされる人もあったとか。その後は二月始め頃、全教科の試験の上、口頭試問は第一から第三まで入念に行なわれたこともあった。」(77頁)
- ⑪ 前掲論文「福岡県教員養成史研究」(五) 66～67頁
拙稿「福岡県教員養成史研究」(六)『福岡教育大学紀要』第30号 第4分冊 昭和56年2月

110頁

- ⑫ 『福岡県統計書 第二編 学事』 明治41年～大正13年
- ⑬ 前掲論文「福岡県教員養成史研究」(五) 67頁
前掲論文「福岡県教員養成史研究」(六) 110頁
- ⑭ 前掲論文「福岡県教員養成史研究」(五) 67頁 と 74頁
前掲論文「福岡県教員養成史研究」(六) 110頁 と 120頁
- ⑮ 福岡県『県の教育』大正4年 67～68頁
- ⑯ 前掲書『福岡県女子師範学校誌』 20頁
- ⑰ 福岡県教育百年史編さん委員会編 『福岡県教育百年史』 第二巻 資料編(明治Ⅱ)昭和53年3月25日 529～530頁
- ⑱ 前掲書『福岡県女子師範学校誌』の中には、英語について、つぎのように明記している。
「英語は選択科目であったが、大正の一時期は第一学年だけ必修科目で、第二学年以上は選択科目になっていた。」(61頁)
- ⑲ 同上書 62頁
- ⑳ 前掲論文『福岡県教員史研究』(五) 68～69頁
- ㉑ 前掲書『福岡県女子師範学校誌』 61頁
- ㉒ 前掲書『福岡県教育百年史』 第二巻 520頁
- ㉓ 前掲論文『福岡県教員史研究』(五) 69頁
前掲論文『福岡県教員史研究』(六) 113頁
- ㉔ 前掲書 『福岡県教育百年史』 第二巻 928～929頁
- ㉕ 『福岡県統計書 第二編 学事』による。
- ㉖ 前掲書 『福岡県教育百年史』第二巻 522頁
- ㉗ 同上書 531頁
- ㉘ 『福岡県公報』第21号 大正元年12月26日 8～10頁
- ㉙ 前掲書 『福岡県教育百年史』 第二巻 523頁
- ㉚ 同上書 524頁
- ㉛ 同上書 532～533頁
- ㉜ 前掲書『福岡県女子師範学校誌』の中に、当時の講習科について、語ったところがあるが、やゝ記憶ちがいのところがある。
「大正三年まで講習科というのがあったがこれは尋常小学校教員養成の目的で設けられたもので、修業年数は二年であった。学科課程についての確かな資料はないが、現存者の話によると、本科と大差はないが、公民科、漢文、英語、家事の学科がなく、他の教科の総時数も本科に比べると少なかったようである。」(61頁)
- ㉝ 同上書 44頁
- ㉞ 『福岡県教育会々報』第99号 明治40年3月15日 46頁
- ㉟ 同上書 46～47頁
- ㊱ 同上書 47頁
- ㊲ 『明治41年福岡県統計書 第二編 学事』 79頁
- ㊳ 『大正5年福岡県統計書 第二編 学事』 86～87頁
- ㊴ 前掲書『福岡県女子師範学校誌』 80頁
- ㊵ 同上書 81頁
- ㊶ 同上書 82頁
- ㊷ 同上書 85頁
- ㊸ 同上書 86頁
- ㊹ 同上書 151～153頁。放火事件についての詳細な報告あり。
- ㊺ 『福岡県公報』第21号 大正元年12月26日 15頁
- ㊻ 前掲書『福岡県女子師範学校誌』 88頁
- ㊼ 同上書 89頁

- ④⑧ 同上書 90頁
- ④⑨ 同上書 65～70頁
- ⑤⑩ 同上書 71～79頁